

ロイコトゾーン病の現況

例年、梅雨が明けて夏に入る頃から、昨年秋のひなや、早春ひなが冠が白くなり、非常にきれいな緑色の下痢を始め、産卵中のものは休産するものが出て来ます。またひなが突然口からきれいな血を吐いて死ぬものが見られます。これがいわゆる鶏のロイコトゾーン病で、最近のように多頭羽飼育になり、特にケージが多くなりますとよく目につきます。

一昨年頃はひなが血を吐いて死ぬものが見られましたが、昨年の県内の発生状況から見ると、このようなものは殆んど見られず、比較的早春のひなで、そろそろ産卵を始めようかというようものが被害が大きかったようで、今までの常識では、余り平飼には発生がないと考えられていましたが、非常に環境のよい平飼鶏舎でも発生し、大きな被害をうけております。

鶏のロイコトゾーン病は、丁度人の「マラリヤ」や、牛の「ピロプラズマ」のように、赤血球の中で発育する原虫の寄生によって起るもので、赤血球中で発育するために赤血球が壊れて貧血し、冠が白くなったりするのもこのためです。

この原虫は、ニワトリヌカカと言う1mm位の小さい虫の吸血によって媒介されますが、ニワトリヌカカの分布は極めて広く、県内ではほとんどいづれの場所でも採取されており、田圃のあるところはもちろん、山間部の水溜りのような場所、干拓地の塩水のあるような所でも採取されますので、ニワトリヌカカの居る範囲では、何れの場合でも感染の機会があるわけです。ニワトリヌカカは今までの研究によれば、夕方頃から僅かに鶏に舎入り、夜12時を過ぎてから、朝方の2時、3時頃までの間が一番多く鶏舎に入るようで、朝までには鶏を吸血して外へ出て行って終わります。ニワトリヌカカは、外界の最低気温が50C度位になると、土中より成虫となって出て来ますから、県内でも4月頃から発生し、10月から11月始めまで発生が続きロイコトゾーン病の媒介を続けます。ここで簡単にロイコトゾーンの原虫の発育状況を記してみましよう。

次にこれらに対する対策について考えてみますと

1、ニワトリヌカカの殺虫または忌避

殺虫剤、忌避剤を使用してニワトリヌカカを殺し、または鶏に近よらせないようにすることによって、本病の発生を防ごうと考えた方法ですが、実際には実施が非常に面倒であり、ある程度の効果がありますが、実用的ではないと考えられます。今年は除虫菊等の燻しによって、殺虫または、忌避の効果をねらおうということが考えられています。

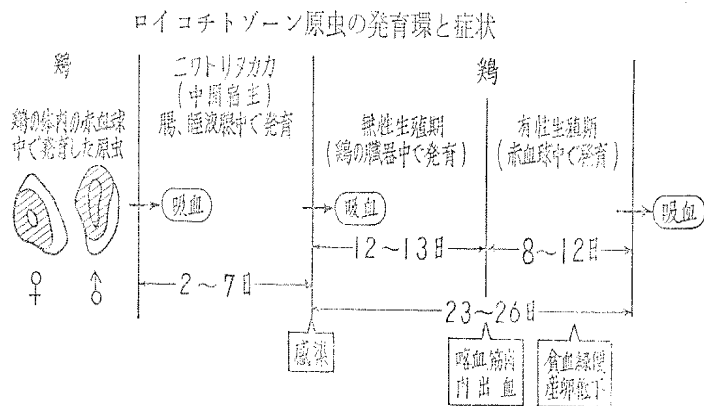
2、飼料中への薬品添加による発生予防

一昨年頃から各種薬品が多く試験され、昨年はフラン誘導体等が主に使用されましたが、決定的な効果はなかったようです。しかし、スルファミン剤で一部効果のあるものが認められ、県では、岡山大学、養鶏試験場において、追試験の形で現在比較試験を実施中で、今秋までには詳細な結果が得られると思われます。

3、治療試験

昨年は相当に試験が行なわれましたが、本年は大体発生予防に重点をおき、発生予防薬に効果があれば、余り必要がないと考えられます。

本年は例年になり長雨ですが、ニワトリヌカカは県下各地で採取調査が続けられており、前年と余り差異がなく発生しているようです。この長雨で鶏も大部影響を受けていることが考えられますので、梅



雨明けの酷暑とともに、本病も相当発生があるのではないかと考えられます。